

双眼鏡越しに、向かいにあるビルの裏口を見ている。雨が降っていて、人通りは普段より少なかった。

どうせなら、このまま降り止まなければいいのに。

あたしの仕事は、金を貰って対象を消すこと、いわゆる殺し屋だ。

なにも、人を殺すことが好きで、これを稼業にしているわけじゃない。

ただ、そういう運命にあっただけさ。

「晴れの日、雨の前触れだ」

彼女が覚えている、男との最初の会話だった。

彼女は言った。それ、何かの比喩？

「空を見て、自分の魂を落ち着かせる。それを言葉にする。お前もやってみろ」

しばらく空を見てから、彼女は口を開いた。

そもそも、この仕事の大半は、準備と待機に費やされる。対象の行動を調べ上げ、あとは、その機会を狙う。ひたすら、待つ。

だから、この仕事に一番必要とされるのは、忍耐といていい。

男から最初に教わったのは、気配を消すことだった。

「それは、姿を隠すこととは違う。そこにいるのに、いない。いないと思ったら、次の瞬間にはいる」

彼女が黙っていると、男は続けた。

「ただのハッタリにすぎん。だが、これさえあれば、お前は誰にも負けない」

服の下に忍ばせたナイフに、触れる。

使用する得物には、よくナイフを使う。

いつもの手順を踏んで、いつもの武器を使う。これがもっとも確実で、ミスが少ない。

男は、いつもナイフと拳銃を携帯していた。

「こだわりを持つのは、アホのすることだ」

これが彼の口癖だ。

彼女は、かつて尋ねたことがある。そのナイフと銃は、こだわりじゃないの？

男は、少しだけ口を歪ませた。

「お前の言う通りだ。これは、俺がまだ弱い証拠だ」

今回の依頼は、その経緯からして、少し妙だった。

仕事をするとき、あたしは、だいたい何人かの同業者と行動する。その仕事に合わせて、顔ぶれは入れ替わる。

でも、今回は、あたしだけだ。もちろん一人で仕事をしたことも、これまでに何度かある。

多少臭かったが、結局引き受けることにした。これでも、

腕に自信はある。

「違和感を覚えろ」

仕事をこなすようになった頃、男がそんなことを言った。「何か感じたら、どんな段階であろうと、そこで手を引け」彼女は反論した。どんな状況でも完遂するのが、腕が立つってことなんじゃないの？

男は、いつもより険しい表情で、語気を強めた。「目の前の落とし穴に気付いて、立ち止まるのがプロだ。臆病になれ」

対象が裏口から出てきた。あたしが隠れている方向へ歩いてくる。

あと10歩、近づいてきたら、そこで。

ん？

何だ、この女。

いつからいた？

いや、こんな至近距離に人がいたことにあたしが気付か

彼女は、倒れている女を眺めた。

首があらぬ方向に曲がっている。口から舌がだらしなく出ていた。

向こうから歩いてきた、スーツ姿の若い女が、立ち止まる。

「終わった？」

「見ればわかるでしょ」

彼女の声は、小さかった。

「相変わらず、『腕』がいいわね。今回のターゲット、同じ業界の人みたい」

「どうでもいい」

「はいはい。囿になった私の身にもなってよ。雨も降ってるし、気が滅入ることばかり。じゃ、またね」

スーツの女は、その場を離れていった。

彼女は、それを見送ることなく、空を見上げた。どんよりとした雲に覆われている。そのまま、静かに呟いた。

やまない雨はない。